



青蓮寺阿弥陀堂

町並みについて

- ◆鎌倉期からの相良氏による球磨地域の領知^{※2}は、この黒肥地地区から始まるとされています。遠江国から入国した相良氏の館跡が球磨川沿いがあり、中世以来の町づくりの基準となる青蓮寺参道とそれを中心とする地割が、現在も残ります。
- ◆国内でも鎌倉期の景観を残す町並みは希少で、青蓮寺や国内最古級の木造茅葺楼門がある王宮神社などの歴史的建造物の数も群を抜いており、貴重な社寺建築の宝庫です。

※2…土地を領有して支配すること



王宮神社楼門

町並みの中心(核)となる伝統的建造物

青蓮寺

国指定重要文化財

- ◆黒肥地地区の中心に位置し、この青蓮寺を中心に鎌倉期の地割が残っています。上相良家の三代目頼宗が、初代頼景の供養のために1295年にその埋葬所に阿弥陀堂を創建し、後に頼景夫人の青蓮尼の位牌所として同寺を建立しました。
- ◆現在の阿弥陀堂は室町中期に再建されたお堂で、広さ10m×10m、茅葺き屋根の高さは13mと県内最大の茅葺きの堂です。また、阿弥陀堂背後の斜面にある石塔群は、相良一族の供養塔や任職の墓石で五輪塔78基、石塔婆22基が立ち並び、相良氏の永い歴史を証明しています。

青蓮寺から球磨川に向かい南行する参道が中世の地域開発の基準線でした。球磨川付近では、この参道と鎌倉期に開削された「鮎ノ瀬井手」が直交しており、相良氏による当地の都市計画や勸農政策の名残がよくわかる町並みとなっています。

